

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	27K21	氏名	栗原 由紀
研究主題 —副主題—	小学校外国語活動における HRT の英語指導力の向上 —ALT と HRT のティーム・ティーチングの関わりを通して—		
所属校	八丈町立三原小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>2020年の教科化に向けて、小学校外国語活動の課題は何だろうか。問題の所在を明らかにするために、日本英語検定協会のアンケート「小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査」の結果と、上智大学がALTを対象にした大規模アンケートの結果から、小学校教員は、英語指導力、指導の内容や方法及びALTとの連携及び打合せに課題があることが分かった。TTの授業については、「ALTが授業を計画するにあたって任されている割合」では、「全てを任されている」・「半分以上任されている」の二つを合わせると81%のALTが授業計画の大部分を任されているということが分かった。筆者は、このALTへの依存性の高い授業の問題は、二つあると考える。第一はTTの構造的な難しさ、第二はHRTの指導力不安である。打ち合わせ時間が不足していることによる役割分担の不明確さや、英語指導について専門性の高いT1とT2の間に壁が生じることから生み出されるのではないだろうか。そこで、ネイティブスピーカーであるALTが単独で指導する方が有効なのではないかという問いが生じてくる。これに対し、脇本（2013）は、HRTが指導にあたるべき理由を「児童の実態を把握し、外国語活動の目的を理解している担任の先生が指導することが望ましい」と述べている。</p> <p>本研究では、「外国語活動の HRT の指導力向上」を図るために、TT を活用する。その理由は以下の三点である。①実現可能性が高い研修の場である。（現在、実施されている TT の指導形態を利用することは実現性が高い。）②英語を発する実践トレーニングの場になる。（研修の不足から英語力を高めるための研修の機会となる。HRT は日常生活において、英語を発話する機会が少ない。TT の授業を「英語を発する実践トレーニングの場」として捉える。）③英語指導力向上のための研修の場になる。（ALT と HRT で行う TT の授業を双方の英語指導力を高めるための研修の機会と捉える。二人が同時にお互いの指導を見合い、授業作りを担い、授業の経験と授業後のリフレクション（省察）を繰り返すことで、英語指導の教材観や指導観を共有し、コミュニケーションの時間を増やすことで、英語指導力向上を目指す。</p>
II 研究の方法	<p>1 ALTとHRTへのインタビュー調査 2015年9月7日にALT派遣会社A社（ALT講師管理責任者と事業統括本部副本部長へのインタビューを行った。同日、現場で実際に指導にあっているA市立B小学校第5・6学年HRT2名へのインタビューを行った。現段階におけるTTの課題を明らかにし、指導の可能性を見出す。</p> <p>2 自分がALTとしてTTを行う〈アクションリサーチ〉 筆者がALTとしてTTの内部に入ることで、HRTの指導力向上のために必要なTTの形を実際に示す。A市立B小学校の第5・6学年の2学級でTTによる授業を行う。HRTの英語指導力向上、またTTの授業改善へのアプローチとして、筆者が二つの支援策を考え実践を試みる。一つは授業中にHRTに働きかける支援策、二つは授業後の支援策である。研究対象のA教諭、B教諭と担任学級の児童数、授業実践の学習単元等についての詳細を表1に示す。さらに、本研究ではALTの視点からALTの内面を描くことを試みる。ALTにとってHRTはどのように見えているのか、指導力向上のためにどんな形のTTが有効かということを示す上で、ALTとHRTの双方の視点から研究主題に迫る。</p>

### III 研究の結果

インタビューの発話をKJ法により分類し、分析した結果、ALTとHRTの外国語活動の授業に対する考え方の相違として以下の四点が挙げられた。①コミュニケーションに関する相違 ②英語使用（クラスルームイングリッシュ）に関する相違 ③TTに対する指導観の相違 ④児童の到達目標の相違である。それに対して、二つの支援策を考案し

実践する。第一は授業中にHRTに働きかける支援策、第二は授業後の支援策である。具体的な内容は表1に示す。分析の結果、以下六点の変化が見られた。I 教室の立ち位置の変化、II クラスルームイングリッシュの使用の変化、III コミュニケーションモデルとしての変化、IV インプット量の必要性の認識の変化、V 教材観の広がり、VI T2の役割の変化である。六点の内、以下、「教室の立ち位置の変化」について示す。

#### I 教室の立ち位置の変化（ビデオ記録による分析）

A教諭：教室後方→教室窓側→教卓付近（教室前方）児童の間を柔軟に動く（リフレクションによる分析） B教諭：教室後方→教室窓側→教卓付近（教室前方）  
B教諭は、側面や後方にいる理由としてHRTのTTに対する考え方が明らかになった。HRTとしては、T1に対する邪魔にならないようにという配慮が働いている。また、児童を英語でほめるときもALTに遠慮して小声になっていることがわかる。  
・ALTとしての筆者による考察 ALTはT1として、黒板の前に立っているが、HRTとの距離があり、ロールプレイモデルになって欲しい時も、声をかけにくい。協働で授業をしているというよりは単独で行う意識になる。絵カードを黒板に貼る際も、近くにいないので、自分一人でやろうという意識になる。その他、授業の中で起きる偶発的な事象に対応することは難しい。また、ALTは児童の顔と名前を一致させるのが困難である。名札を付けていても、児童が書いたアルファベットは読みにくいので、間違っ発音してしまうことがあった。できればゴシック体で定位置につけてある方が見やすい。HRTは児童を前から見ていないと学習の様子に気がつきにくいのではないかと考える。大事なのは児童の視点で授業を考えることである。

### IV 考察

本研究を通して、TTという形態の指導法は英語指導の研修の場としての有効性があると実証できたと言える。第一は、ALTが授業中にHRTにロールプレイモデルの役割を投げかけることや学習指導略案に役割をマーカーで明確にすること、クラスルームイングリッシュの課題を与える等、ALTがアプローチしていくことでHRTの英語指導への関わりを変え、これを継続していくことでHRTの指導力向上につながる。と考える。

第二は、授業後のリフレクションはALTとHRTのコミュニケーションの場となり、対話が進むことで関係性を育み、TTの授業改善を促すことにつながる。と考える。経験学習モデルに従い、授業という共通の経験を通して、授業を振り返り、課題を見出す。見出した課題を次の実践につなげて改善していく。このリフレクションを継続していくことができれば、学び合う関係を作り出し、双方の指導力向上につながる。

このようにALTとHRTが一つの授業を担当するTTという指導形態は、お互いに研さんを積む場と成り得るのである。こういった観点から、英語指導の研修不足という問題にとって、TTはOJT機能をもつ研修の場になり得ることから、今後更に、活用していくべきだと考える。

表1: 課題に対して考案した支援策①・②

課題	不安	内容	支援策①	支援策②
相互のコミュニケーション不足	A 観く話す	発音に自信がない	1. 発音教材を活用する。 2. 松野がモニタリングのオンラインイングリッシュ +phonsアルファベット 3. 授業中、担任がロールプレイモデルとなって、デモンストレーションで話す機会を3回以上設定する。 4. 事前にインタビューしてHRTの趣味や得意なこと、食べ物の好き嫌い等について、授業のSmall Talkで触れる。 5. クラスルームイングリッシュの課題1つを与える。 6. 褒め言葉カードを渡す。 例) Good job! Wonderful! Excellent!	授業後のリフレクション
TTに対する指導観の相違	B 授業設計	打ち合わせ頻度が少ない	7. 実践して経験を積み重ねてうちに流れがつかめるようになる。 8. 授業開始前に指導略案を渡す。マーカーで役割を可視化する。 9. 授業の枠組みを決め、カードで黒板に可視化する。	
目標の共有	C 指導	どんな教材や活動があるかわからない	10. 汎用性の高い教具を使用したアクティビティを準備する。 11. 異文化理解の視点で教材を作成する。 12. ⑧の「模範」の使用 13. カード（トランプやテキストに添付されているカードを使用） 14. 児童にとって関心の高い、生活の中や友達に関する身近なものを教材とする。	